

仕立て法の違いが促成ピーマンの生育・収量に及ぼす影響

○田代啓一朗・福元伸一<sup>1)</sup>・永田茂穂・露重美義・鮫島國親  
(鹿児島農総セ・<sup>1)</sup>指宿農改)

【目的】

ピーマンは鹿児島県の主要野菜の一つに挙げられ、専作経営も多い。しかしながら、低収に悩む生産者も多く見られ、近年の輸入増加、産地間競争の激化、重油価格高騰など、促成ピーマン生産を取り巻く環境が厳化し、ますますその経営を圧迫している。

そこで、仕立て法の違いが促成ピーマンの生育、収量に及ぼす影響について検討した。

【材料および方法】

品種は‘TM鈴波’を供試した。2003年および2004年の7月下旬に砂床に播種し子葉展開後、12cm黒色ポリポットに鉢上げ、育苗した。9月上旬に間口7m、軒高2.1mの低コスト耐候性ハウスに定植した。仕立て法として、2条植え主枝2本垂直仕立て（畦幅2.0m、株間40cm、栽植密度250株/a、以下、垂直仕立て）を、慣行のU字4本仕立て（畦幅2.0m、株間55cm、栽植密度91株/a、以下、U字仕立て）と比較した。誘引線の高さは床面から170cmの高さで、主枝の摘心は誘引線上で行った。温度管理は、昼間最高気温30℃、夜間最低気温18～20℃を目標に管理した。収量は、9月から5月までの月別収量および総収量を調査した。施肥は、基肥に成分量でN3.0、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>3.0、K<sub>2</sub>O3.0、追肥でN1.7、K<sub>2</sub>O1.6(kg/a)施用した。

【結果および考察】

第1表 摘心前の生育(2003年)

区名	9月29日			10月22日		
	草丈 (cm)	枝長 (cm)	節数 (節)	草丈 (cm)	枝長 (cm)	節数 (節)
垂直	77.3	52.1	6.6	102.2	77.3	9.8
U字	65.7	34.5	5.4	79.4	57.9	8.9

第3表 株当たり、枝当たり収量(総収量)

区名	株当たり		枝当たり	
	収量(kg)	対比(%)	収量(kg)	対比(%)
垂直	7.45	43	3.73	86
U字	17.43	100	4.36	100

第4表 時期別上品果収量(kg/a)

	定植～3月(対比)		4,5月(対比)		総収量(対比)	
	収量(kg)	対比(%)	収量(kg)	対比(%)	収量(kg)	対比(%)
2003年 垂直	1169	(113)	694	(95)	1863	(105)
2003年 U字	1034	(100)	727	(100)	1761	(100)
2004年 垂直	1048	(142)	683	(109)	1731	(127)
2004年 U字	738	(100)	623	(100)	1361	(100)

垂直仕立ては、慣行のU字仕立てに比べて生育旺盛であるが、同じ摘心高さでは主枝長は短く、節数が少なかった(第1,2表)。また、栽培初期において、U字仕立ては同一株の4本の主枝の揃いが悪かったのに対して、垂直仕立ては揃いが良かった(データ省略)。これは株当たり枝数の違いによる着果負担の影響によるものと考えられ、このような特性から垂直仕立ては草勢管理が容易な仕立て法と考えられた。

垂直仕立ての収量を株当たりでみると、U字仕立てに比べて少なく、また、枝当たりの収量も少なかった(第3表)。

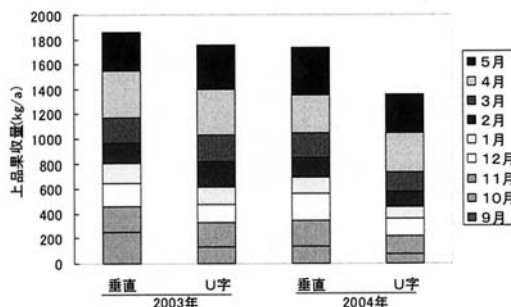
しかしa当たりで比較すると、垂直仕立ての収量は、U字仕立てに比べて3月までの販売単価が高い時期の収量が特に高かった。また、5月までの総収量も定植～3月ほどの収量差はないものの垂直仕立てが高く、上品果収量は、U字仕立てを5%以上回った(第4表、第1図)。

垂直仕立てがU字仕立てに比べて増収した要因には、株当たり仕立て本数の制限および密植の効果が考えられた。

以上のことから、ピーマンの仕立て法改善による多収穫技術として、主枝を垂直に誘引する垂直仕立て法は生育旺盛となり、株当たり収量は低くなるが、高単価期の単位面積当たり収量が増加したことから、有望と考えられた。

第2表 栽培終了時の生育(2003年)

区名	主枝 節数 (節)	主枝長 (cm)	主枝重 (g/枝)	側枝・ 茎葉重 (g/枝)
垂直	26.5	166.5	204.0	607.4
U字	33.1	174.7	198.5	523.9



第1図 月別上品果収量